

## CASE 12 5歳児

ころころドッジボールの  
楽しいところはね、...

協力園  
日出町立  
日出幼稚園

**（幼児の実態）**  
いろいろな運動遊びを楽しんだり、地域の方と触れ合ったりできるラグビー体験教室で、子どもたちは、ボールを抱えて走るリレーなどを楽しみました。その後、投げる、蹴るなどボール遊びをする子どもたちが増えてきたので、保育者はころころドッジボールを遊びに取り入れます。「円の外から投げる人を「オニ」、他のみんなは、円内で逃げる。「オニは、線の中に入らない。中の人も線から出ない。当てられたら交代、オニは帽子が黄色だよ。」保育者から簡単なルールが説明されるころころドッジボールが始まります。



「ボールが来たよ。」「逃げて！」



近過ぎた友だちに「セーフ」の判定



ボードを使って状況説明する保育者



振り返りの時間

園庭に出ると、「オニが少なくなかなかやっつけられないから四人を増やして」と、オニの子どもから要望が出されます。保育者は、みんなにたずね、「そうだね」と承認されて、四人のオニでゲームが始まります。

外のオニは、「エイッ」とかけ声をかけて強く投げたり、たくさん人がいる方向に目標を定めてねらったりします。中の子どもたちは、ボールの転がる進路を見て「わあー」と声をあげたり、オニとは真逆の位置まで走って逃げたりして楽しんでいます。

途中、オニのK児が投げたボールが、近くの二人に当たってしまいました。「今のは無しやろ！近すぎ」とオニを続行するK児。フェアな当て方ではなかったと判断したようです。交代しかかった子どもも「セーフ？よかった！」と、コートに戻ります。近すぎる場合は、「セーフ」とルールを決めているようです。

こんな中、ドッジボールを始める頃によくみられる光景ですが、M児は、オニの近くまで来て、わざとボールに当たろうとします。保育者は、少し離れたところからこの様子を見ていましたが、ボール遊びを止めたり、注意したりする声かけはしませんでした。

ころころドッジが終わり、振り返りの時間になります。「どんなところが楽しかった？」と保育者が問います。M児は、「ボールにいっぱい当たったところが楽しかった。オニになって楽しかった。」と話します。大半の子は「ボールが来ても逃げて最後まで残ったこと。」と残った嬉しさを語ります。K児は、何度も挑戦して友達に当たったことが嬉しかったようです。

そして、何人かが楽しさを話した後、「オニの前に来る人がいた。」と、逃げずに当たろうとしていた子のことが話題に出ます。別の子ども「オニの前に来て。隙間がなくて（投げる方向がなくて）」と、困りを話します。つまりM児の楽しさは、友達の困りでもあったのです。

ここで、保育者は、ボードを使って「オニは、ここ。すぐ前に来た人がいたんだね。」と子どもたちと状況を共有します。子どもたちから「前に来ないで！」、「いろんなところ逃げて！」、「って言ったらどう？」、「また、「○の中（コート）にもう一つ○書いて、中の人は、その線から出ないよ」にするのは？」と改善策が出てきます。保育者は「そうだね。」と共感したり、「○の線が二つになると難しくなるよ。」と問題を指摘したりします。

話題の中心がM児であることを察した保育者は、「前に出る行為」よりも、その奥にある心情を知りたくて「Mくん、どうしてオニがいいの？」と訊を尋ねます。すると、M児は、「だって、ボールにいっぱい触られるもん。」と、逃げるよりボールに触りたい思いを吐露します。「そうか。M君は、ボールに触りたいんだ。」者は思いを受け止めます。「うん。」と頷くM児に、保育者は「じゃ、ボールをいっぱい使う遊びもしいとね。」と約束します。

「でも、ころころドッジは、前に行かない方がいいんじゃない？」と、話題を戻す子に、「そうそう。円の中の時は、走って逃げた方が楽しいんじゃない？」、「最後まで逃げるのスリルあったよ。」と体験を楽しく語る子どももいます。「ころころドッジは、残るのが勝ちだよ。」ドッジボール本来のルールを伝える子どももいます。

「どうかな？」保育者の問いかけに、M児は、少し恥ずかしそうな笑顔をみせますが、ころころドッジの遊び方を見直せたのか、「うん、うん」と頷きながら聞いています。

また、M児の「ボールでいっぱい遊びたい」願いは、他の子どもたちにとっても嬉しい遊びの時間となります。ころころドッジを通して、自分たちが楽しめるころころドッジボールを積み重ね、隣のクラスともボールゲームを楽しむ毎日が続いています。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」

- 言葉による伝え合い
- 健康な心と体
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 協同性
- 思考力の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

**事例から見られる10の育ち**  
道徳性・規範意識の芽生え  
学級のできごとや友達の行動を他人事にしない雰囲気、遊びの中で培われたルールを守る・作るといった力の育ちがある。  
ころころドッジボールをする中で走って逃げる、力いっぱいボールを転がしたりする楽しさ、最後まで逃げ残った達成感など実感している。  
また、外のオニも中の人も気持ちよく遊べるように、ボールに触りたい自分の気持ちを調整しようとしている。

**事例から見られる10の育ち**  
健康な心と体  
離れた友達に当たるように腕を強く振ってボールを投げたり、転がってくるボールの進路をよく見て、走って逃げたりするなど体を思い切り動かして遊ぶ気持ちよさを体験している。  
どう投げたら円の中の友達に当たることができるか、ボールを投げる時の力の入れ具合や、ねらう相手への体の向け方を考え、何度も繰り返し投げることに挑戦している。

道徳性・規範意識の芽生え  
健康な心と体  
環境構成のポイント

- ゲーム途中の問題場面で、声かけや指導を控え、子どもたち自らの解決を期待する保育者の見守り
- 楽しかったこと、困ったこと、これからの生かしたいことを振り返る場の設定。
- 自分の思いや考えを伝えたり、考えを受け入れてくれたりする友だちの存在。
- 子どもの言葉での伝え合いをサポートするための道具（ホワイトボードや磁石付きの子どもの絵）